

内頸動脈-遺残原始三叉動脈分岐部の未破裂脳動脈瘤に対してフローダイバーター留置術を施行した1例

Flow diverter treatment of an unruptured aneurysm located at persistent primitive trigeminal artery

赤路 和則¹⁾ 谷崎 義生¹⁾ 植杉 剛¹⁾ 西 佑治¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経外科

[目的]内頸動脈-遺残原始三叉動脈分岐部動脈瘤に対してフローダイバーター留置術を施行した症例を経験したので報告する。

[症例]77歳、女性。右外転神経麻痺で発症。未破裂内頸動脈-遺残原始三叉動脈分岐部動脈瘤を認めた。経過観察していたところ、右外転神経麻痺悪化、徐々に増大、2年後に最大径13mmとなったため、治療する方針とした。術前より抗血小板剤2剤投与。全身麻酔下にて手術施行。右大腿動脈より6Frシャトルシース挿入。全身ヘパリン化。6Frシャトルシースを右内頸動脈へ誘導。セプターXC 4mm x 11mmを動脈瘤neck部で拡張し、右内頸動脈閉塞試験を施行したところ、Stump pressureはmean 30mmHg(閉塞前置の44%)であった。フローダイバーター留置術の方針とした。DACとして5Fr Navien使用。CHIKAI14にてMarksmanを動脈瘤遠位へ誘導。Pipeline 5mm x 35mmを動脈瘤遠位から近位にかけて右内頸動脈に留置。術後経過は問題なく、右外転神経麻痺が軽減した。1年後のMRAでは、遺残原始三叉動脈を残して動脈瘤は著明に縮小した。

[結語]内頸動脈-遺残原始三叉動脈分岐部動脈瘤に対してフローダイバーター留置術は有効である。